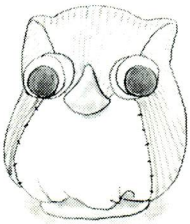
みめぐみの

第29部

みめぐみの

第29部



大谷光道著

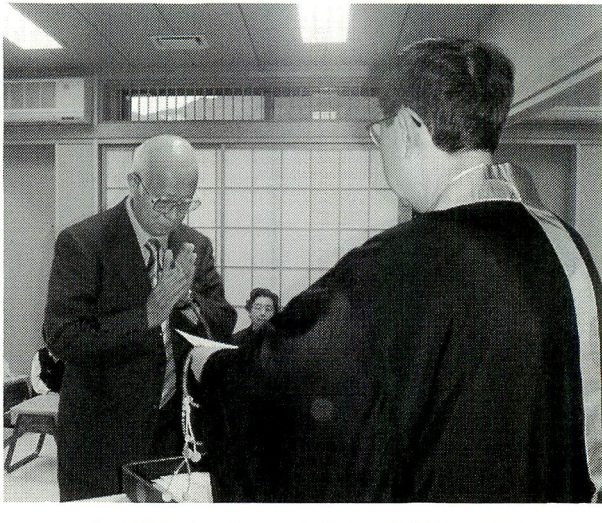
目次

阿弥陀様と本願（一）……2
阿弥陀様の前……4
ひとへに親鸞一人がため…9
命の恩人……13
ご挨拶……15
何のためにある？「本願寺」…18
ご消息……20
「親鸞」と「教行信証」……23
まとめ……27
あとがき……32

阿弥陀様と本願（一）

時の経つのは早いもので、『みめぐみの』を書き始めてから、今回が通巻で三十部になりました。年三回なので十年も経ったことになります。私の拙い話に今日までお付き合いくださった読者の皆様には、いつも深く感謝しております。そして、質問や感想文をお寄せくださった方々にはご一緒に勉強している楽しみをいただき、多くのことを教わり、また激励される毎日です。

そういえば、創刊号に「阿弥陀様が成仏（仏になる）なさってから今まで



建立懇志をいただいた方々への賞典の贈呈

に十劫の時間が経っている」というお話をするのに、落語の『寿限無』を引いたことがありました。

そこで、今回は反対に阿弥陀様が成仏されるより前のお話をいたしましょう。

「阿弥陀様が成仏されて衆生済度のお仕事を始められてから今日まで十劫の時間が経っていて、十劫というのは寿限無さんの名前の中にある五劫の倍になる」というのが、第一部のお話の中身でした。そして「劫」という時間の単位はとても我々の経験できるようなものではなく、それは寿限無さんのお話では「海岸に頂が見えないほど高くそびえる岩があって、そこに千年に一度天女が降りてきて薄いひらひらした衣で岩をサラサラッと一回撫でて、また空高く帰って行く。この岩が擦り減ってなくなるまでの時間」という途方もないものでした。

今からのお話もみな劫が単位になるので、うーんと気を長く持ってください。

阿弥陀様の前

さて、阿弥陀様は成仏されるまでにどんなご苦労があったのか、また阿弥陀様以前はいったいどのようであったのか、おおよそ次のようです。

一、五十三仏

久遠の昔、錠光如来という仏様が世に出られ、数限りない衆生を導いて覚りを開かせ、やがてご入滅になった。そのあと、光遠如来、月光如来、栴檀香如来、……、龍音如来、処世如来と、五十三方の仏様が順次お出ましになった。この五十三仏の次・五十四番目に出られたのが、世自在王如来という仏様であった。

《五十三仏のお名前は末尾に記載》

二、法蔵菩薩の出家

ある国の国王が世自在王仏の説法に深く感動し、ついに国も王位も捨てて出家されることになり、法蔵と名のられた。世自在王仏は、法蔵菩薩の

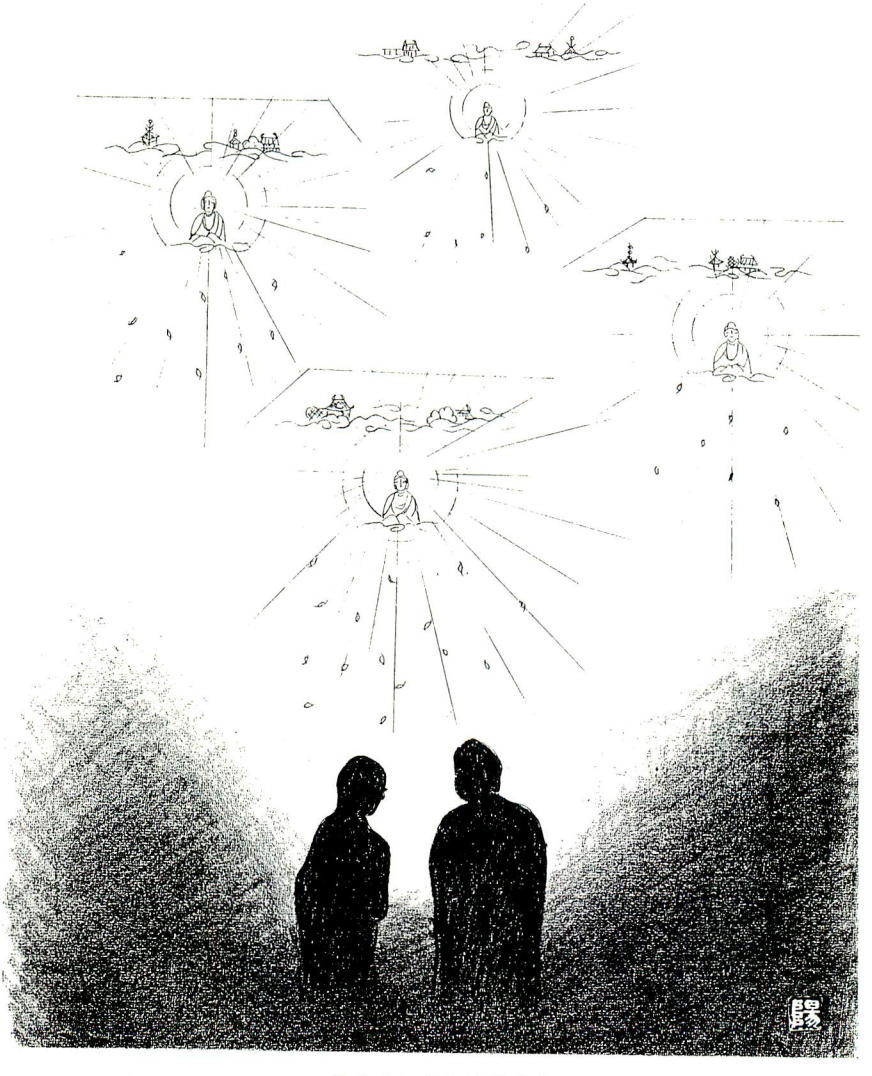
強い願いによって実に二百十億もの仏様の世界とそこに住む人々のありさまをお説きになった。さらに菩薩の願いに応じてそれらをことごとくつぶさに見せてくださった。

三、五劫に及ぶ思惟

法蔵菩薩は、ご自身の浄土を作ろうと決心され、五劫の間思いを回らして、世自在王仏に見せていただいた二百十億もの仏様の世界のすぐれたところと、浄土を建立するために必要な清らかな修行とを選び出された。そして、師仏（世自在王仏）に向かって「お聞きくださいませ。私の願いをつぶさに申し上げましょう」と言って、四十八の願（四十八箇条の願）を述べられた。

四、菩薩の修行

それからいよいよひたすら修行に専念して、片時も休むことなく浄土の荘厳（建設）に励まれた。その浄土ははてしなく広く他に例がなく超え優



世自在王仏と法蔵菩薩

れ、いつまでも変わることのない世界である。そして我々の頭では考えも及ばぬほど長い劫の間、菩薩の数限りない種類の修行を積むことによって、法蔵菩薩は阿弥陀仏と仰る仏になられて、浄土の建立は成し遂げられた。

五、極楽

それから今までに十劫を経ている。その間阿弥陀仏は数限りない衆生を教化された。その浄土は「極楽」と言って、ここから西に十万億の仏土を過ぎたその先にある世界である。

《『仏説無量寿経』の一部を要約》

法蔵菩薩が成仏されたのは、ご自身が覚りを開かれたというだけのことではなくて、私たち凡夫のために極楽（浄土）を建設してそこへ私たちを迎えてやろうという、まさに衆生済度のためだったのです。

その第一段階は、凡夫が修行も何もしなくても簡単に往生でき、さらに成仏できるような「浄土の設計」でした。そのために五劫という長い時間をか

けて考えに考えてくださって（五劫思惟）、やがて四十八箇条の大願が完成しました。

次に、お経には「兆載永劫」と書いてあるので、それこそ五劫よりも十劫よりも遙かに長い時間のことですが、そんなに長い時間をかけて修行を重ねてくださってやっと浄土ができあがったのです。これは「浄土の建設」の段階です。

まとめると、

五劫　思惟の後、四十八の大願を発こす　浄土の設計

兆載永劫　修行の後、成仏して阿弥陀仏に　浄土の建設

浄土完成

十劫　衆生済度

ということになります。

ひとへに親鸞一人がため

阿弥陀様が成仏される前も後も、気を失いそうなほど長い時間を費やしてくださっているのに、ただただ驚くしかありません。

しかし、他のどんな仏様も「手の尽くしようがない」としてお諦めになった、どんな修行も身に付かない凡夫という厄介者を、しかも最優先で成仏させてやりたいとのお慈悲を終始持ち続けて、本願通りの浄土を作ってくださったのです。長い長い劫の間の数限りないご修行という、途方もない手間暇が要ったのも、実はこの凡夫という厄介者を成仏させるためだったのです。

それで、親鸞聖人はこのことについて、「それは全く私一人のためだったのだ」と仰いました。それは聖人が時々口にされたお言葉として『歎異抄』に伝えられています。

聖人（親鸞）のつねの仰せには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案

ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候ひし……

意訳する前に、ここに出てくる「業」について少し整理しておきましょう。

仏教では「どんな行いにもそれに見合った結果を、その行いの内に秘めているものである」という物事に対する深い観察から、結果に注目した行為のことを業と言います。

たとえば、自分のやったことの結果を自分で受けることを「自業自得」と言います。これは業をわかりやすく端的に表す言葉で、日本人の生活に深く浸透した常識になり文化にもなっています。これは悪い場合に使うことが多いですが、よい場合にも当然当てはまる真理です。

しかし、ここで聖人が仰っている業は、文の前後の関係からも明らかなように悪業のほうです。悪業というのは、罪、悪またはその基となる煩悩など、

仏法に反逆したり遠ざかったり、また近づこうとしない行い全般を言います。ただし罪とか悪とかと言っても他から罰を与えて反省させるという種類のものではありません。わかりやすく言うならば「自分で胸に手を当てて痛みを感じるもの」「大きな顔をして仏様に向き合えない心の状態」といったところでしょう。

さて、そこで本文の前半は、

「阿弥陀様が五劫という長い時間をかけて本願を練り上げてくださったのは、よくよく考えてみるとただただこの親鸞(私)一人のためだったのだなあ。」

京都西北ロータリークラブでの講演

ということで、ご自身をこの世でもっとも救われにくい者だと深く感じ入っておられるお言葉です。これを裏返すと「阿弥陀様が私さえ救おうとなさらなければ、五劫もの時間はかからなかったのだ。五劫でなく三劫でよかった。いや、一劫ですんだのでは……。私だけのためにこんなにご苦労くださったのだ。」ということになります。

つぎに、その「私（親鸞）」の何が原因で阿弥陀様の思惟が五劫にも及んだのでしょうか。それがこの部分の後半で、

「（悪い）業をたくさん持っている私であるから、その業によって決してよい将来は訪れない。それでも助けてやろうと思い立ってくださったのだ。本願のありがたさが身にしみる思いだ。」

ということで、ご自身の業がその原因であるとの思いを表され、それでも助けてやろうとの阿弥陀様のお慈悲が身にしみるとのことです。

命の恩人

先日、自殺しようとして電車の線路に飛び込もうとした女性を助けようとして間に合わず、命を落とされたお巡りさんへの花束を事故現場に供える人が後を絶たないと、報道されていました。また、数年前、ホームに落ちた人を助けようとして亡くなった韓国の留学生のことが映画になるとも新聞に出ていました。

連日のように身勝手な犯罪を耳にするなど殺伐たる世の中で、このようなニュースに接すると、言葉を超えた世界に突然投げ出されたような感動に触れることになるのは、どなたも同じことでしょう。助けられた人からすると、まさに命の恩人、それも自らの命を捨ててまでも救ってくれた恩人中の恩人です。

「そくばくの業を持ちける身」とは「多くの業のために来世は地獄行きし

かない者」です。その私を助けてくださる、まさに阿弥陀様は命の恩人と言うほかありません。わずか数行のお言葉から、親鸞聖人はこの命の恩人の出現を常々有難く感じておられたことが、伝わってきます。

〔以下次号〕

『五十三仏』

錠光如来、光遠如来、月光如来、栴檀香如来、善山王如来、須弥天冠如来、須弥等曜如来、月色如来、正念如来、離垢如来、無著如来、龍天如来、夜光如来、安明頂如来、不動地如来、瑠璃妙華如来、瑠璃金色如来、金蔵如来、燄光如来、燄根如来、地動如来、月像如来、日音如来、解脱華如来、荘厳光明如来、海覚神通如来、水光如来、大香如来、離塵垢如来、捨厭意如来、宝燄如来、妙頂如来、勇立如来、功徳持慧如来、蔽日月光如来、日月瑠璃光如来、無上瑠璃光如来、最上首如来、菩提華如来、月明如来、日光如来、華色王如来、水月光如来、除癡暝如来、度蓋行如来、浄信如来、善宿如来、威神如来、法慧如来、鸞音如来、師子音如来、龍音如来、処世如来

ご挨拶

一昨年秋、嵯峨野に移った本願寺は、この度京都府知事の認証をいただき、宗教法人「本願寺」となりました。この大きな節目にあたってご挨拶旁々、ここで本願寺の存立意義を明確にいたしておきたく、筆を執りました。

新聞にも報道されましたが、宗教団体として活動してきた「本願寺」が、去る一月三十日、京都府知事より宗教法人「本願寺」設立の認証をいただき、法務局にその登記も完了いたしました。

読者各位もご承知の通り、代々大谷家は京都市下京区の真宗本廟（現在の正式な名称。元は東本願寺と呼んでいた）に居住してまいりました。前住・闡如（せんにょ）上人が昭和五十三年十一月、本願寺の真宗大谷派からの独立を宣言されて以降、住まいの一部に「本願寺寺務所」と呼ぶ事務所を構えられ、爾来今日まで約二十九年間有縁の方々と共に宗教活動を続け、一昨年十一月二十七日には御遷座（せんざ）法要を執行い当地に移転しましたが、これまでは宗教団体の

「本願寺」として世に認められてきました。

したがって、このたび宗教法人になったからといって、活動それ自体の質が変わるわけではありませんが、我が国の公益法人の一つとして応分の責任を担っていく義務がある一方、社会一般に対しても確固たる足場を築くことが出来たことは確かです。

なお、「大谷本願寺」の呼称は今後とも通称として使うこととし、昭和五十三年の独立からの流れに思いをいたし、正式名称は「本願寺」とすることにいたしました。

四月十三日は前住上人のご祥月命日ですが、今年はそれに合わせて前日に法人設立奉告法要を営むことにいたしました。正しい教えを広めるための確固たる足場を設けることは亡き前住上人の悲願であったので、そのご命日に合わせてこの法要を営むことはまことに相応しいことだと思います。それというのも、「この世では『やがて往生できる身とならせていただく』にとどまり、往生と成仏は命終わって後（後生）のこと」と教えてきた浄土真宗の

伝統の教義とは異なり、「この世で往生・成仏する」という説を唱える人たちと前住上人が対峙されてきたことが、かつての紛争の真相・根幹であり、前住上人は正しい教えを広めるための拠点を持つことを何よりも望んでおられたからであります。

本願寺、殊に慶長七年（一六〇二）、教如上人が徳川家康公から七条烏丸に寺地の寄進を受け創設されて以来通称「東本願寺」と呼ばれてきた私たちの本願寺では、歴代法主が宗祖親鸞聖人の教えに照らして教義・信仰の正否を判断し、正しい教えに乱れを生じないよう責任を持ってきたので、前住上人はこの伝統を重んじるとの信念から、法主から教義上の権限と責任をなくしてしまう方向を明確に打ち出した真宗大谷派の宗憲改正（昭和五十六年）には真っ向から反対されていたのであります。

嵯峨野に移った本願寺は「東」のこの伝統を堅持して、前住上人のご遺志に応えながら、「わかりやすい浄土真宗」を広く地道に伝えていきたいと存じております。

何のためにある？「本願寺」

私は出来るだけ「わかりやすい浄土真宗」のお話をするよう心がけてきました。それでも舌っ足らずや説明の拙さのため「わかりにくい」とのお叱りを受けることがあります。今後ともちろん「わかりやすい」を念頭にお話ししながら、どなたにでも親しんでいただける寺作りをしていくことに変わりはありません。

さて、今ここで明確にしておきたいのは、「本願寺の本来的使命は何か」ということです。「通称『東本願寺』と呼ばれてきた私たちの本願寺では、歴代法主が宗祖親鸞聖人の教えに照らして教義・信仰の正否を判断し、正しい教えに乱れを生じないよう責任を持ってきた」と言いましたが、皆様方はおそらく「そんなこと、当たり前だ」と仰ると思います。

確かに、戦前くらいまではこれは「当たり前の伝統」でした。ところが、終戦頃から何十年という年月をかけて「それが当たり前であってはいけな

い」とする考えの人たちが、次第に真宗大谷派（寺院の集合組織）の執行部を握るようになっていきました。そしてまたその人たちは、教えの内容についても徐々にそれまでの当たり前とは違ったことを唱えるようになりました。つまり、教えの番人としての法主をなくすことと、伝統とは別の教えを推し進めようとしていったのです。そこで、制度の上でも教えの上でも「当たり前の伝統」を守ろうとされた前住上人との間にいろいろな紛争現象が起き、しきりに報道されたのです。しかし、より大切な「教えの上での当たり前」を守ろうと躍起になっておられた前住上人のことは、ほとんどと言っていいほど知られていません。

昭和五十三年の真宗大谷派からの本願寺独立宣言や、その後の結局は日の目を見なかった移転計画などは、前住上人の「当たり前の伝統」を取り戻そうとされた動きだったのです。

ご消息

まず、前住上人が昭和五十七年に発示された『御消息』によって、教えの上での前住上人のご心労の一部を窺うことができます。《本文：末尾参照》

ご消息というのは歴代の法主が信心の要を説かれたお手紙で、寺院やお講宛てに下付され、法座の都度僧侶が拝読するものです。またこのご消息は、当時有縁の寺院や御門徒に配布されていた『本願寺』という新聞にも掲載されました。今、その一部を意訳します。

近来、自分勝手な教説を立てる者があるのを聞くのは悲しいことである。ある説に言っている。

「阿弥陀様の本願が成就したと説かれている部分《『仏説無量寿経（大経）』》に「即得往生」とあることからして、この身のままで（生身、この世で）往生を得るのである」と言い、「さらにこの世がそのまま浄土であ

る」と言い、他人までも惑わす者がいる。

あるいは「還相回向の大用（浄土へ生まれた者が衆生済度のために再びこの世に帰ってきて、人々を教化して浄土へ導くという阿弥陀様のお働き）が自分に具わっている」と言いたいために、あたかも「私が還相の菩薩である」とするような根拠のないでたらめな説は、思い上がりの極みと言わなければならない。阿弥陀様の大きなお慈悲のお心を忘れた定善や散善の自力に迷った姿と言わねばならない。

親鸞聖人は明かにお示しである。

「即得往生」というのは、信心を得ると直ちに往生が定まるということで、直ちに往生が定まるというのは不退転（迷いだけの心境には戻らない位）に定まるのをいう。不退転に定まるというのは、直ちに正定聚（この世の命終わって必ず仏になる位）に定まるのである。（『唯信鈔文意』）

浄土へ往生するまでは不退（不退転）の位においでになるので、正定聚の位と名付けておいでになるのです。（『末燈鈔』）

と教えてくださり、それ故に蓮如上人は、

「正定聚はこの世での利益、覚りは浄土での利益で、二つの利益があるのである。」

とお説きくださっている。

議論するまでもなく明らかなことである。

この『御消息』では、要するに、

一、往生というのは死んでからのことではなく、この身のままで今生きているうち（現世）に往生するのである。

二、浄土とはよそにあるのではなく、この世がそのまま浄土なのである。

三、自分は還相の菩薩である。

と言う人がいると聞くが、これは自力に迷ったものであって、「即得往生」の言葉だけが一人歩きした結果である。即得往生とは「信心を得ると同時に、命終わってからの極楽往生が確定する」という意味で、この世で往生すると

いう意味だと思ったり、さらにこの世を浄土であると錯覚したりしてはいけない。これは、議論するまでもない明らかなことだ。

とお示しくださっているのです。

「親鸞」と「教行信証」

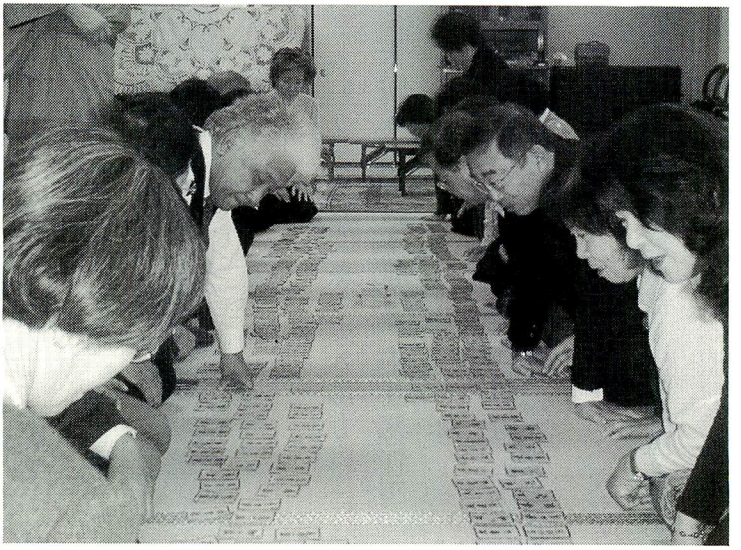
また、このようなことがありました。

平成元年に発行された『岩波仏教辞典』という、仏教関係者以外にも広く用いられている辞書について、発行の直後本願寺派（西本願寺）より発行元の㈱岩波書店へ訂正の申し入れがあり、平成二年七月、宗教紙だけでなく広く一般新聞にも取り上げられたことがあります。ここでは一般紙より詳しく取り上げている七月二十六日の『中外日報』を見ていただきます。

『岩波書店に抗議』

本願寺派では、株式会社岩波書店（安江良介社長、東京都千代田区一ツ橋）の『岩波仏教辞典』の中で、宗祖・親鸞聖人並びに基本聖典である

『教行信証』各々の記事に「不適当かつ誤った表現」がなされており、このことが同派の教学研鑽はもとより伝道活動に支障をきたす等として、二十日までに明山孝文総局公室長名によりこれら表現の訂正、削除を求める要望書を岩波書店に対して行なった▽『岩波仏教辞典』が刊行されたのは昨年の十二月。今回本願寺派が問題としたのは「親鸞」の項目中の「他力信心による現世での往生を説き」と、「教行信証」の項目中の「この世での往生成仏を説いた」の二



大谷家恒例のかるた会（お正月）

カ所▽同派では、親鸞聖人は「信心決定し現世において正定聚の位（往生・成仏が決定した位）となり、命終わって浄土に往生して直ちに成仏する」と説いたのであり、「現世での往生を説き」は不適当、また、「この世での往生成仏を説いた」は誤りである、と各々指摘▽そして、これらの記述が「親鸞聖人が、現世において浄土に往き生れて、悟りを開いて仏に成ることを説いた」と理解できるとし、「このような見解は教団として決して容認出来ないもの。また、学問的にも成立しえない」等と、出版元の岩波書店に対して表現の訂正・削除を求める要望書を二十日までに送付した。なお、この要望書を受け取った同社の岩波仏教辞典編集部では「申し入れの内容については編者と相談したうえで対応したい」としている。

たまたま、私も一九九五年（平成七年）版の『岩波仏教辞典』の電子ブック版を使っているので、「親鸞」と「教行信証」のところを見てみましょう。訂正のあとが窺われます。

◎親鸞（著述）　しんらん

……他力信心による現世での往生を説き……

◎親鸞（往生・成仏思想）　しんらん

なお、親鸞の往生・成仏思想について、浄土真宗本願寺派や高田派の教義では、命終って浄土に往生し、ただちに成仏すると説く。また真宗大谷派では、信心決定（けつじょう）後の生活が往生であり、その帰着点が成仏であると説く。…

◎教行信証　きょうぎょうしんしょう

……この世での往生成仏を説いた。なお、親鸞の往生・成仏思想については→親鸞

これによって、遅くとも平成二年の時点で、往生や成仏についての教えが浄土真宗本願寺派（西本願寺）や高田派の解釈と真宗大谷派の解釈に大きな違いがあったということが、よくわかります。

西、東、高田派では、それぞれ古来より細部において強調する部分が違っ

たりはしますが、このような浄土真宗の教えの根幹に属する部分、すなわち

一、いつ往生が決まるのか——→信心を得たとき。

二、いつ、どこへ、往生するのか——→この世の命終わって、阿弥陀様の極楽（浄土）へ往生する（行って生まれる）。

三、いつ、どこで、成仏する（覚る）のか——→二、の後、極楽で成仏する（阿弥陀様と同じ内容の覚りを開く）。

という、往生と成仏についての教えは、変わりません。

まとめ

以上、前住上人の『御消息』と、同じ浄土真宗でも他派の教えについて、教えのもっとも大切な要の一つである「往生」と「成仏」について見てきました。

私たちの本願寺は、せっかく新天地に移転したのですから、新しいものをどんどん取り入れていかなければ、その意味がなくなってしまいます。しか

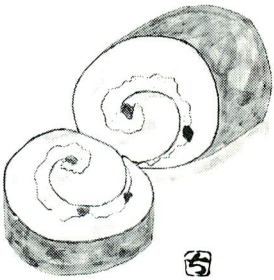
し、そのような新しく形を作っていくという面と、どうしても変えてはならないものとがあります。

教えや儀式作法などはどうしても古くからのものを守らなければ、それこそ新設した意味がなくなってしまうのです。教えについて、浄土真宗の他派には「当たり前の浄土真宗」が脈々と流れているのに、教如上人に始まる「東」の流れの中では、私たちが守らなければ他に守ってくれる人はいないのです。「東」の流れの中では私たちが残していかなければ、大切な伝統が絶えてしまうのです。そうさせないための新設なのです。

以上述べてきたことは、私たちが何を守っていかねばならないのかをお話ししただけで、決して「事を構える」つもりなどありません。先回の特集で「協議離婚」にたとえてお話ししたように、真宗大谷派とはせっかく別々になってそれぞれの道を行こうと決めたのです。ただ「私のほうの道はこれだ」という点を、法人設立を機にはっきりさせておこうというのがこの稿の趣旨なのです。しかしもちろん、教義についての議論を避けようというので

はありません。有意義な議論の機会があれば、願うところです。

以上、この度の法人設立という節目にあたり、本願寺の古さと新しさについてまとめてみました。



《闡如上人『御消息』》

夫れ祖師聖人は、念仏成仏これ真宗、萬行諸善これ仮門と厳しく真仮を分ち給ひ偏へに元祖法然上人の念仏往生の真義を明かにし給へり。

即ち立教開宗の聖典たる教行信証には、われらの往生の因果全く他力廻向なることを明して浄土真宗に往還二種の廻向を開き

「往相の廻向に就いて真実の教行信証有り」と宣ひ

「若しは因若しは果一事として阿弥陀如来の清浄願心之廻向成就し給へる所に非ること有ること無し、因浄なるが故に果亦浄なり」と宣示し給ふ。

而もかくの如き浄土真宗は

「愚禿すゝむる所更に私なき」

唯有浄土の真説にして、ひとへに相承七祖の宣説し給ふところなれば祖師聖人はこれを承けて専修専念の義を立て、われらが往生の肝腑を示し給へるなり

まことに

「弥陀の本願と申すは名号を称へん者をば極楽へ迎へんと、誓はせ給ひたるを深く信じて称ふが、めでたきことにて候なり」

とあるは専修専念の義を最も明かに説き給へるなり。

「然れば相承の義定んで仏意に背くべからず流れを汲む徒衆ただ仰いで信をとるべきなり」

いま幸に真実の教に遇ひ難くして遇ひ聞き難くして聞くことを得たるは、ひとへに次第相承の善知識の恩徳といはざるべからず

然るに

「末代の道俗近世の宗師自性唯心に沈んで浄土の真証を貶め定散の自心に迷うて金剛の真信に昏し」

と歎かれし如く

近来ほしいまゝなる教説を立つるものあるを聞くは悲しきことなり。

有説に曰く

願成就の文に即得往生とあれば現身に往生を得るなりと云ひ延いては此土がさながら報土なりと云ひ惑はすもの

或は

還相廻向の大用をわが身に具する如く云はんが為に、宛もこの身を還相廻向の菩薩とする如き妄説は、ただこれ増上慢の極みと云ふべし。

如来の大悲矜哀を忘れたる定散自力の迷心と云ふべきなり。

祖師聖人は明かに

「即得往生は信心をうればすなはち往生すといふ

すなはち往生すといふは
不退転に住するをいふ
不退転に住すといふは
即ち正定聚の位に定まるなり」
「浄土へ往生するまでは不退の位にておはしまし候へば正定聚の位となづけておはします
ことにて候なり」
と教へ給ひ、それ故に蓮如上人は
「正定聚は此土の益、滅度は彼土の益として
二益なり」
と説き給ふ。
論判分明なりと云ふべし。
また和讃に
還相の廻向ととくことは
利他教化の果をえしめ
すなはち諸有に廻入して
普賢の徳を修するなり
と示し給ひ
安楽無量の大菩薩
一生補処にいたるなり
普賢の徳に帰してこそ
穢国にかならず化するなれ
と説き給ふ。
異論あるべからざるなり。
ここに「自身は現に罪悪生死の凡夫
常没流転無有出離之縁」の機と知らしめられ
たゞ仏智の不思議誓願の不思議を仰いで
無有疑心の信楽に住するとき摂取不捨の利益に
あずけしめ給ふことを喜ぶべきなり。
摂取不捨のゆへにこそ正定聚の利益を
得しめらるゝことにてたゞ
「大悲倦きことなく常にわが身を照し給ふ」
光明の悲用を思ふべきなり。
われらいま釈迦弥陀二尊の矜哀によって本願の
まことに遇ひ奉り
たゞ念仏せしめらるゝことはひとへに祖師聖人
並に相承の善知識の御勧化の賜であることを忘
るべからず
前住上人はいみじくも
「祖師は紙衣の九十年」
と詠ぜられたり。
ここに仏恩の深重なることを念じ師主知識の遺
徳を喜び本願を信じ念仏申す無碍の一道を歩む
べきなり。
殊に「往生は一人々々のしのぎ」
と誡められたることなれば速かに即得往生の安
心を決定せられんこと肝要なり。

あなかしこ　あなかしこ

釋闡如　御印

あとがき

みめぐみの刊行委員会

本文中にも触れておられますが、「みめぐみの」も通巻三十部、まる十年。これも読者の方々のお支えがあってのことと深く感謝申し上げます。

今回は、原点の第一部の続編です。阿弥陀様の願いと、それを受け止められた親鸞聖人のお姿を映し出して下さり、以下次号に続きます。

一昨年十一月には新天地への移転、そしてこの度の宗教法人認証と、大きな動きがありました。この機に「ご挨拶」を通して「往生と成仏とは…」と私たちが聞いていくべき往生・成仏の要を「私たちのほうの道はこれだ」と締めくくられました。

今後も発信される光道法主のメッセージを、さながら現代版「御消息」として純粋に真っ直ぐ受け止めて行きたいものです。

みめぐみの　第29部

2007年3月5日　印刷
2007年3月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会

〒616-8432
京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内
TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220
振替口座　01060－5－56990

印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊